

# 新書紹介

## 明治の宮廷画家——五姓田義松

神奈川県立博物館編

神奈川県文化財協会 二五二頁 二、〇〇〇円

五姓田芳柳——ごせだ・ほうりゅう、五姓田義松——ごせだ・よしまつ、渡辺幽香——わたなべ・ゆうこ、倉持子之吉——くらもち・ねのきち。難読姓名クイズではない。横浜ゆかりの明治の洋画家五姓田義松家の人々である。芳柳は父・幽香は妹、子之吉は義弟。幽香は結婚して渡辺姓となり、子之吉は芳柳の養嗣子で二世芳柳を名乗った。

興味深いのは全員画家であり、しかも幕末、明治初期に一早く西洋風の洋画（洋風画）を描いた進歩的な画家一家であったことである。日本の洋画草創期においてこれほど恵まれた家庭環境はなかった。そこから育った天才画家が五姓田義松。その義松の「空前絶後」といわれる大規模な回顧展が昭和六十一年十

月十一月に神奈川県立博物館で開かれた。本書はそのカタログである。

五姓田義松（一八五五—一九一五）は安政二年江戸に生まれた。横浜開港四年前のことである。この風変わりな姓は義松の父芳柳が、浅田という家に生まれながら事情があつて養子先を転々とし、森田、津田……と五回ほど姓をかえたすえに「五姓田」と自身自身で命名したからだった。義松は幼時から絵に才能を表して慶応元年、横浜で諷刺漫画や油絵を描いていたイギリス人チャールズ・ワグマンに入門、明治元年頃横浜に定住する。十代から絵の教授をし陸軍士官学校の図画教師に就任。第一回内国勲業博覧会では最高賞を受けた。明治十一年明治天

皇の北陸東海御巡幸に御付の画家として同行、さらに昭憲皇太后を描く。そうした明治の皇室や元勳たちの仕事が多かった関係で明治の宮廷画家（正式にその名称はなかったが）と呼ばれるわけである。二五歳のときフランスに留学、レオン・ボナのアトリエに入学し、サロンに水彩画を出品、日本人としてはじめて入選した。その後画家デビエの肖像、人形の着物などでサロン入賞を重ね本場でも義松の絵画技術が立派に通用することを示した。八年後アメリカ経由で日本に帰国し、明治美術会の創立に加わる。父とともに渡米しナイアガラの滝を描いたこともあつた。帰国後は大隈重信、井上馨などの肖像を描き、大正四年横浜市中区打越の自宅で歿（六〇歳）した。そして現在日野公園墓地に眠っている。このように明治を生きた天才画家義松の画歴（特に前半生の）は華麗だが、その基礎をなしたのは幼少の頃の家庭環境にあったことはいまでもない。

なく、ほとんど忘れかけられている。何故か。五姓田義松という難解なあるいはユーモラスな姓名が災いしたのか？その疑問の呈示がこの展覧会とカタログの趣旨である。

実は、一見華やかな（本書では「宮廷画家」とうたっている）義松の生涯には、破滅的な負のイメージがつきまとっていた。それは八年におよぶパリ留学時代にはじまる。はじめこそサロンで活躍したものの、その大半は借金に追われ、酒に溺れる荒んだ生活を送っていたらしい。フランス女性との結婚を父に反対されたためともいう。そうした義松の心の葛藤や苦悩を「日記」から読みとることができると、今まで日記の一部しか公表されていなかった。それが本書で全部公刊されることになった。加えて書翰類や関連記事など義松の資料が六〇ページ以上、作品図版が三〇〇点以上掲載された。それらを活字にし公表することが本書の「ねらい」であり、それは大変な作業であり意義も大きい。これまで義松専門の本や画集は一冊も出

されたことがなかった。このカタログは義松にとって待望の初めての本なのである。これからはこのカタログの図版と資料によって、誰でもが——意欲さえあれば——義松研究をすることができると。

ところ、明治に活躍した義松の人と芸術を知る人は今日少

さる。あまりにも早く若く一流の、あるいは宮廷の画家となつた義松は、父芳柳や師ワグマンの期待のままに伸びた義松は、それで完結した存在だった。」と義松を十数年にわたって追究してきた青木茂氏が感慨深く回想している。さらに義松展の企画者である横田洋一氏、美術史学界のリーダー高階秀爾氏が力のこもった評論を寄せ、義松の実像を日本と西洋から探し求めている。今、美術史の学界では明治以降の近代美術の見直しが盛んで、義松の再評価はその代表である。本書に載せられた義松のみずみずしく新鮮な水彩や油彩を見たとき、読者も明治の埋もれた天才画家の発掘に参加できる。そして読者の共感を得られたとき、義松が本当に魅えられたといえるだろう。

△市民局 岡部昌幸